

『泥の河・蛍川・道頓堀川』

宮本輝著／ちくま文庫

『とり残されて』

宮部みゆき著／文春文庫

『まだ人間じゃない』

フィリップ・K・ディック著／ハヤカワ文庫 SF

10代後半から20代初めにかけて、凡そ小説と名のつくものは読まなかった。理系の勉強には関係ないものだと思っていた。研究室に入って、卒論に苦勞した。理系の方が文系よりも文章を書かねばいけないらしいと気がついた。何か読んで言葉を勉強しようと思った。

ふと手にしたのが、宮本輝の「泥の河」「蛍川」「道頓堀川」のいわゆる川三部作である。泥の河の冒頭、荷物を曳いた馬が必死になって太鼓橋を上ろうとするが、力尽きて後ずさりして御者を轢いてしまうシーンを鮮烈に思い出す。蛍川は、少年達の周りを、見渡す限り無数の蛍が乱舞するのが美しい。青年になって大阪に戻ると、生活の背景には道頓堀川。読者一人一人に映画のワンシーンの様な印象を残す物語小説である。川三部作は、ちくま文庫から一冊にまとめられて出版されている。

易しい短い言葉を連ねていて簡単そうで、真似出来ないのが宮本輝の小説の凄いところである。同じく言葉が易しい現代の物語作家が宮部みゆきである。最初に知ったのは、文芸春秋の対談記事であった。小説が書けなくなって精神科の診断を受けたら、一ヶ月休みなさいとのこと。暇だから、ゲームを始めたらはまった、という内容であった。が内容より驚いたのが、「ミヤベ」と自分のことを書くこと。「何だこの軽い作家は」と半分馬鹿にしながら、短編小説を手にした。

読んだ瞬間驚いた。そこには「軽さ」は微塵も無かった。決して緻密では無いが、生き生きとした表現があった。ミステリーから時代小説まで幅広い作家だが、ここでは、短編集『とり残されて』から一作紹介する。

「たった一人」は、時空の歪によって巡り合った男女が、歪の消滅によって二度と逢えなくなる切ない小説である。時空の歪の消滅とともに、恋した男性は元々存在しなかったことになり、記憶も失われる筈である。が、主人公の女性は、忘れぬ人に逢ったという思いを残した。お互いが恋しながら、しかし、二度と逢

うことが出来ない生き別れ。学生の皆さんはこれから何度か体験するのもかも知れない。それもまた、人としての成長の過程なのだろう。

翻訳物は、日本語の美しさを学ぶのは難しいが、優れた物語は数多くある。SFに分類されるが、フィリップ・K・ディックの小説が面白い。バーチャルリアリティーという言葉が一昔前にはやったが、ディックの小説は遥かその上をいっている。バーチャルリアリティーは、存在しないものが本物らしく見える、つまり、見ている人は現実でないことを知っている。一方、ディックの小説は、「自分が住んでいる世界は本物だと思っていた。がある時、それは存在しない虚の世界だと気がつく」というもの。現実の不確かさ、不安定さを描き出す。地下室でジオラマを作っていた夫が、ある日、ジオラマの住人になってしまい、二度と地下室から戻ることのなかった「小さな町」（短編集『まだ人間じゃない』に所収）はその一つ。読んだ後、ゾクとした恐怖を感じる。読後が何とも不安な気分になるので、気持ちが落ち着いている時に読むのをオススメする。

三氏の作品は、共に幾つかが映画化されている。読んだ時のイメージが、映像で十分表現されているかどうか。一度ゆっくり観てみたい。

執筆者紹介

木村 悟隆

生物系准教授。専門領域は、高分子物性、天然由来分子の液晶形成挙動、高分子の固体NMR。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『泥の河 蛍川 道頓堀川 川三部作』 宮本輝著 ちくま文庫 1986年 840円
『とり残されて』 宮部みゆき著 文春文庫 1995年 570円
『まだ人間じゃない』 フィリップ・K・ディック著(浅倉久志) ハヤカワ文庫
2008年 777円

[ブックガイド目次へ](#)